別紙様式３

上越教育大学研究プロジェクト　終了報告書（若手研究）

研究代表者　所属・職名　人文・社会教育学系・講師
氏　　名　　長谷川　佑介
研究期間　平成３０年度

研究プロジェクトの名称	Focus on Form の視点を取り入れた発見型の英語授業に関する考察
研究プロジェクトの概要	本学が掲げる「21 世紀を生き抜くための能力＋α」の概念には、課題の解決法を自ら発見する力や学習内容を現実世界に活かそうとする姿勢が含まれる。英語の授業を通してこうした資質・技能を育むためには、現実世界のコミュニケーションで生じる課題の中で学習者自身が「ことばの仕組み」を発見するという経験をさせることが有効であろう。そこで、本研究では、英語教育学において近年注目されている Focus on Form という指導理念に注目した。Focus on Form とは現実世界におけるコミュニケーション上の課題と結び付けて外国語習得を促すような手立ての総称であり、例えば教師がある文法事項を有意味なコミュニケーションの中で繰り返し使ってみせ、生徒がその「ことばの仕組み」に気づくように促す指導技術（input flooding）などが含まれる。本研究では、その指導技術を活用した具体的な実践方法について検討した。
研究成果の概要 ※申請時にチェックした「取組課題」との関連とその成果も明記すること。	Focus on Form による英語授業の典型例は、コミュニケーションを中心とした言語活動と関連づけながら、教師が程よいタイミングで英語の文法や語彙の指導を行うというものである。しかし、Focus on Form には、学習者の“基礎力”（語彙知識など）が不十分だと英語の理解が追い付かず「ことばの仕組み」の発見に至らないという弱点もあり、学校現場で十分に取り入れられているとは考えづらい。そこで、本研究では、input flooding の指導技術と英語語彙の短時間学習を組み合わせた授業手順を考案し、その試行的な実践を行った。具体的には、リスニング中心のコミュニケーション活動（約 10 分間）の中で接触節と呼ばれる文法事項に 15 回以上触れさせ、その後に教師の発話の一部を書き起こしたものを読んで解釈する紙面上の課題を実施した。実践の結果、文法事項の説明は全く行っていないにもかかわらず、生徒は接触節を含む発話の意味を理解できるようになっていた。その一方、input flooding だけでは「ことばの仕組み」を体系的に理解させることは困難であることも示唆された。
研究成果の発表状況	研究方法と成果をより詳細にまとめた論文を執筆し、下記題目にて『上越教育大学研究紀要』に投稿した。 Hasegawa, Y. (forthcoming). The effect of input flooding guided by form-focused activities: A practical report of basic English classes. *Bulletin of Joetsu University of Education, 39.*
学校現場や授業への研究成果の還元について	本研究プロジェクトによる研究成果は、本学で実施している教員免許法認定講習においても活用し、地域の小学校教員にも積極的に還元する。また、2019 年度には研究成果を分かりやすくまとめて上越地域の高等学校等の英語科教員向けに発表することを予定している（2019 年 2 月現在）。

【提出期限】平成３１年３月２９日（金）正午：厳守